戦旗

共産主義者同盟機関紙
第七号
一九六〇年三月一日発行
発行所
東京都文京区元町一の七
世界労仂運動研究所
編集 発行人 鏑木 潔
一部 十円

万国の労仂者団結せよ！
革命的前衛・共産主義者同盟を
すべての工場に組織せよ！

「戦旗」固定購読
お申し込みは
東京都文京区元町一丁目七
世界労仂運動研究所内
共産主義者同盟書記局
定価 一部 十円
月 三〇円 半年一八〇円

国公地公 春闘の火蓋きる

二月廿五日、国公地公百五十万は霞ケ関官庁街に一万人を結集した二時間の職場大会を中心に、六大都市での半日休暇など全国的な十年ぶりの統一闘争で春闘の火蓋を切つた。

この力をきつかけに春の大攻勢に入るべき今、総評は中心を「四月攻勢」に遅らせ三・一九も晴海埠頭集会にしようとしている。これに対し京都・大阪地評を中心に三・一九国会包囲の要請が出され、青学共闘では三月卅一日に独自でチャペルセンター前の集会を決定するなど、闘う準備は進んでいる。この力を急速にのばさねばならない。

最大の中心点大蔵省は、早朝七時から警官隊によつて包囲され、地下鉄出口に待ち受ける職制とともに組合員を省内に引きずりこむ構え。これに対し国公共闘は向い側の旧防衛庁前で職場大会を開き支援ピケでつつんだ。しかし九時十分を過ぎれば全員賃金カットを行うとの当局の通告により大蔵は脱落、無念の拍手のうちに去つて行つた。

これに対し隣りの全農林では、九時廿分人のいない庁内で始業ベルが鳴りひびくのを合図に、最高裁側入口のピケに警官隊がおそいかかつた。この直前、人事院と防衛庁前の部隊が一斉に車道に出て蛇行デモをはじめ警官隊を釘づけにした。ゴボー抜きでピケがとりはらはれても、警官の垣を通つて庁内に入つたのは全林野の第二組合を中心にした百たらずで、警官が引くと指令もなしで再びピケが張られ、二度目にゴボー抜きが行われた時にはほとんど入るものはいなくなつた。この間正面玄関では人事院ビルや全建労、さらに全国から集つていた非常勤職員の代表も含めて三千人の大会が十時半まで続いた。地方では、六大都市で三割～五割の半日休暇が闘われた。この日の闘いは、全体として中心点大蔵の脱落と「長期の構え」の指導により大爆発には至らなかつたが、国公労働者の力の一端を引出すものとして大きな成功であつたといえよう。

全力を三・一九国会包囲へ！

三・三一国会デモを

全国青学共闘方針決定

国公地公の立上りをよそにして、総評は炭労と協議のうえ三池闘争のヤマを四月上旬におき、これにすべてを合わせる方針を決めた。さらに全逓は処分闘争全国化を圧殺し、国鉄青函は独走を決めえず、電通も一票投票をおくらせている。それに加え、民間は私鉄に出された安定賃金の回答を、「春闘相場」にする事態であり、このままでは四月上旬の統一闘争の直前に、三池の妥協を中心に全体がくずれ去ることは火をみるより明らかとなつた。

安保闘争も、国公地公をはじめ意識的に闘争課題からはずされており、三・一九は晴海埠頭集会によりエネルギーを海中に捨て去る策謀が国民会議で進んでいる。これを打ち破る闘いを春闘準備で活発化している職場の中で、ただちに始めねばならない。

京都・大阪両地評は総評に対し、三・一九国会包囲をやれと要請し、中央青学共闘では三月三十一日に独自でチャペルセンター前の集会を行うことを決めたが、三・一九から三・三一そして四月上旬の本物のゼネストへのコースをすぐ具体化せねばならぬ。

京都・大阪に続き、全国から三・一九国会包囲をつき上げろ。特に東京各地区は東京共闘・同地評をふみ切らせるため全都をあげてつき上げ決議をし独自の国会デモを組織せよ。

全学連は三・三一を支持し活動を開始したが、あらゆる青学共闘・組合青年部を中心に、三・三一を支持して具体化せよ。総評につぶさせるな。

国公地公は三月十日で第一波の力をがつちりとくみあげ、三月十九日には最大限の力を組織せよ。今度はもう長期闘争だから、と闘いを弱めることは許されぬ。

公企労はヤマをはずす策動を打破るため下からの突き上げを強化せよ。民間は「私鉄相場」の考え方をぶつとばし、みずから先頭に立つて立上がれ。上部に身をあづけたら、何もできなくなる。

ただちに三・一九ストと国会包囲の意思統一を！ あらゆる職場、共闘に三・一九、三・三一―四月ゼネストの路線を！ 晴海の策謀をぶつつぶせ！ 安保批准を労仂者の実力でぶつつぶし、岸内閣を打倒せよ！

試験のさ中国会へデモ

首都五百名学生

二月二十五日、国会「修正権」問題をめぐり議論沸騰する国会へ、二時頃から都内各大学の自治会旗を押したてて、全学連五百名の学生が「審議の即時中止」を要求して、議員面会所に結集した。議員面会所の玄関前には、すでに大勢の警官が、ピケをはり、不当にも学生の通行を阻止した。即時に、玄関前で抗議集会を開き、警官の人垣を突破せんとはげしくもみ合つたが残念ながら、学生を倍する一千の警官の暴力で、首相官邸前の坂道を特許庁の前まで押しもどされた。再び警官の人垣を排して、今度は第三議員会館につめかけた。会場がせまいので玄関わきの車よせの所で社会党激励集会を開いた。社会党を代表して赤松勇議員が院内闘争の決意を述べた。

三時半、日比谷へむけてデモを開始。人事院の附近では警官の抵抗をはげしいもみ合いで排除して進んだ。

夜間の「安保改定阻止、平和予算要求国民集会」の後のデモでは、ストライキで決起した中央労仂学院の学生を加えて全学連六百は戦闘的デモを展開、労仂者の強い拍手をあびた。

すべてを 四月ゼネストへ

三月十六日に臨時大会

全学連中央委員会決定

国会デモ、羽田闘争で安保闘争の先頭に立ち、大量起訴の弾圧にもめげず闘う全学連は、廿八・九両日第廿二回中央委員会を開いた。会場は百余名の中央委員に加えて三百名以上の学生が傍聴につめかけ、試験、休暇などの中でも、批准阻止を闘う全学連のはりつめた気力をしめした。

論議は、羽田闘争を中心とした総括と、四月ゼネスト批准粉砕の方針をめぐつてたたかわされた。

第一日目の総括では、「羽田行きは必要であつたが、全学連の行動はまちがつていた」あるいは「デモはまつたく無意味」とケチをつける"動揺"と"学生運動放棄"の日共、革共同の二つの反対提案は、賛成者がそれぞれ十六名、二十二名で、一人の同調者も獲得することができなかつた。七十二名の圧倒的多数の中央委員は、羽田闘争に対する執行部の指導を完全に支持した。第二日目の情勢ならびに任務をめぐる討論の結果、四月二十六日にはゼネストで闘うことを確認し、その前しよう戦にあたる三月三十一日の青年労仂者・学生の一万人国会デモと四月五日の闘いには、新学期開始に先きがけて、出来得る限りの学生を首都に結集して、大衆的に闘うことを決議した。続いて、二十回、二十一回中央委員会の決定を無視し、「国会デモ反対」「羽田デモ反対」のビラをまいて、重大な規律違反をおかした革共同関西派の八執行委員の責任が追求された。中央委員会は、圧倒的多数で、これら闘争指導を怠り、分裂活動のみを行つてきた八執行委員を罷免し代りに、一貫して大衆闘争の先頭に立つてきた八学生を新執行委員に選出した。又、四月大政治闘争の成功を保障するために、三月十六日から三日間、臨時学連大会を開催することを決定した。十一月から一月にいたる大衆闘争の昂揚の中で、その日和見主義を紐帯に完全な野合をとげた、日共、革共同の二分派、は反主流統一戦線をはり、執行部の乗取りを策して、四月臨時大会を主張した。しかし、この四月闘争の繁忙をねらつた露骨な分派的要求は、多数の中央委員の怒りを買い、執行部提案通り、三月における臨時大会の開催となつた。

処分への怒りを組織せよ

全逓、「最高」四時間を最低に

十七日から、十九日まで全逓の中央委員会が開かれたとき、一月末の大量処分に対する反対闘争が中闘の無方針をのりこえて下部から闘いがはじめられていだ。名古屋中郵では七万の郵便物がたまり、三重四日市でも二万たまつた。年末闘争を闘つた労仂者の階級的怒りは、なくなつてはいないことがまざまざと示されていた。ところが、この労仂者のエネルギーに中央委は、正しい指導を与えたか？ 答えは、労仂者の怒りに対する無関心と、裏切り、だつた。

中央委は、第一に、猛然とはじまろうとした処分闘争を「法定闘争」に解消するという裏切り方針をだしてこれに水をぶつかけた。第二に、あの重大な年末権利闘争の総括を指導のあり方の階級的な点検によつてではなく「組織の力量まで闘つた」という、労仂者が心の底で感じている不満をまるで無視した、非階級的形式的な総括にした。第三に、「安保問題で第十一次統一行動は羽田へ動員すべきだつた」という東京米山中央委員の発言などもあつたが、実際は安保闘争の方針はほとんど討論されなかつた。そのほか非常勤の専門委員会附託などにも批判がだされたにとどまつた。

全逓の自覚した労仂者は、こうした方針をのりこえてすすむだろう。一応型式的にきめられた三千円の賃闘を本当にかちとるまで、トコトンまでやりぬく線をきめよう。

安保反対の闘いで、中央委できめた「最高戦術」四時間ストを最低として、かならず闘う体制を作れ。非常勤撤廃、増員そのほかあらゆる職場要求を出し、今度の春闘こそ、労仂者が闘えるだけ闘つてかちとろう。一切の処分に即時の反撃を加えよ。解雇三役の完全な団交権を獲得せよ。

「七千円をとれ！」

全電通職場の組織進む

一定額七千円という大巾賃上げ要求を決め、内外に注目をあびた全電通労組十七万では、十一日午後より行なわれた団体交渉で、「すべての不当処分を撤回せよ」「一律七千円の賃上げを認めよ」「等給を撤廃せよ」「拘束四十四時間三十分とせよ」など二十二項目にわたる要求書を提出した。ついに闘いの火蓋は切つておとされた。

公社政府ではマスコミを使つて一斉に「不当な要求」「願望だけの要求」などと闘う意欲をそらせるために努力をする反面、就業規則の改悪案を提示したり、東京電信、東京市外、福井、直江津などに秋期闘争の責任追求というかたちで処分を出し先制攻撃をかけてきた。また大阪市外にみられるように労務課主催で運用業務部門の座席主任を集め「労務研究会」なるものをつくり職場における主任の立場など九項目について部課長が講議し、「春闘対策組織切くずし対策」の活動を始めている。

電通事業がベラボウにもうけていることはだれでも知つているが、三十五年度ではさらにわをかけた額に達する。ここの収支差額は四八九億円となり、これから債務償還金一一五億円を差引いたとしても三七四億円が建設勘定に繰入れられる。皮肉なことに「働らけ働らけ」で全労働者がこんなに一生懸命働らいて儲けた金が合理化資金に使われ、首切り、配転、転職になつてまた労働者を苦しめてくるのであるから馬鹿げたことだ。それだけではない。こんど新らしい法律が制定されると一加入者当り最高十五万円の電話債券の購入が義務づけられるのだから儲かるのは公社ばかりだ。アンケートをとつたら「七千円をこんどこそ欲しい」と出たのは当然だ。今、組合では三月十日を目標に全組合員から一票投票を行い全体のエネルギーを結集するために連日教宣オルグ活動に全力をあげている。この投票いかんが重要な一つの鍵だ。

全国千七百有余の職場で話し合いオルグ活動が続けられている。以下は各支部・分会がそれぞれ創意を生かしてどのような活動を行つているか、その特徴をあげてみよう。支部委員会、分会代表者会議、討論集会、常駐オルグはどこでも行なわれているが、労働講座をもつところ、グラフや図表で説明しパンフで組合員署名入りのオルグをするところ連日シラミつぶしのオルグ、交替制勤務者のため朝昼夕方にわけ執行部総出動の各職場オルグ、組合員とともに仕事をしながら歩くオルグ、各分会五～八名位単位の話し合いひざづめオルグ、年令別に分けたオルグ、色けのあるところで婦人組合員と毎週金曜日いつしよに弁当をたべながら話し合うオルグなどさまざまな工合で行なわれている。教宣では連日早朝「春闘号外」配布、家庭版の作成、分会通信員が春闘中毎日支部へ電話をかけることなどが行われている。進んだところではすでに青年行動隊が作られている。全体の気勢をあげるためハチマキ、腕章で闘う雰囲気を作つている。

さてこのように多くのところで今までになく真剣にオルグが行はれている。それにしてもどういう内容が話され、組合員の関心、闘う決意がどうなつているかが一番重要だ。

どこでも中心になるのは七千円を本当に闘いとれるか、不当処分に対しどう闘うのか、安保改定、合理化との闘いなどである。その中でも七千円にたいする関心はきわめて高い。「アンケートの集約とはいえ、ビッタリこない」「本当にやるなら最後までやれ」という意見が多い。ある組合員が「いままで七千円なんて要求をだしたこともなかつたしとつたこともなかつた。だから「ユメ」のように思うが自分の生活の状態、公社のベラボウにもうけている状態を考えると要求はあたりまえだし、闘い以外にないと考える。それで闘いもいいかげんにやらないで本部はしつかりしてもらいたいね。職場のみんなはそれが一番疑問じやないかな」と語つたが、これが今の多くの組合員の本当の気持であろう。

やはり要求をだした以上トコトンまで闘い、途中で本部が裏切らないこと、処分が出たら完全撤回まで闘いぬくこと、このことを組合員は真剣に考えている。本部の腹がまえ、活動家の断固とした決意と行動が全体の状態を決める最重要点になつている。このことがまだ「低調」を伝えられる春闘全体の枠をこえる大きな闘いになるのだ。

三洋につづけ

大手右翼の裏切り許すな

電機労連廿二中委

きたる三月五日、電気労連第二十二回中央委員会が開かれる。その中心議題は、昨年末の二十一中委において決定された春闘の日程を十日ずらすことだ。

なぜ延されるか。これまでいつも足をひつぱつてきた日立労組執行部が、念入りに資本家とボス交を続けすぎたため十日あとにのばさざるをえず、全体におしつけようというのだ。活動家藤田君の不当解雇を資本家とのボス交で認めた日立執行部が何をボス交したかは明らかだ。日立を始めとする右翼大手はいつものやり口で春闘統一闘争を挫折させ資本家との取引で自らの地位を安定化しようとしている。

しかし、電機労連の中には新しい息吹きが生れている。それは昨年春闘の三洋、松下に、また昨年来の八欧闘争の中にはつきり見られる藤田をまもる会の動きは新らたな展望をきり開いた。

電機労連の先進的活動家はもはや日立幹部の横暴を今回限りで根絶せねばならぬ。今春闘の中で、昨年に始つた胎動を拡大せよ。裏切りと脱落を許さず統一闘争を闘い抜け。昨年三洋労組は非妥協の闘いで大幅賃上げをかちとり電機労連革新の中核となつた。各労組は脱落せず二五〇〇円以上の大幅賃上げと闘う部分が損にならない配分を闘いとれ。「三洋労組に続け！」これがわれわれの春闘スローガンだ。安保粉砕と三池支援が労仂者の中心的任務として明確にされねばならぬ。藤田君の不当解雇をみとめた日立幹部を追求せよ！ 藤田君問題も統一闘争の目標としてかかげよ！

主張

ゾウの皮膚を脱ぎすてろ

マルクス主義者の左らかの分裂

(一)

二月二十三日、鋼管川鉄・日炭高松に次いで第三の大経営細胞である日共三菱長崎造船所細胞の西村前委員長らが、同細胞の党員の大部分を率いて脱党したことを明らかにした。昨年末、東京の労働運動の中枢である港地区委員会が公然たる党内闘争に入つたのに続いて、今度は東洋一の大造船所が日共と断絶し自らの道を進みはじめたのだ。この様な例は、全国の多数の労働者細胞において最も戦闘的な分子の除名・脱党という形で急ピッチに進んでいる。

彼等は、一昨年われわれが同盟を創立した時と同様「共産主義者として、共産主義者の道を歩むために」と公然と宣言している。

吉本隆明が、中央公論新年号の巻頭に「現在のような政治思想の老衰を、放置できる度量はたれももちあわせてはいない」から、「かならずしも適任ではないが」「手あかにまみれた政治思想の伝授形式を打破する」のは、幻滅の世代に課せられた任務」だからと書いた「戦後世代の政治思想」は進歩的文化人なの間に深刻な影響を与えている。自ら「政治に文化人を使うな」という彼の一文に、三文指揮者のタクトに踊らされているといわれた文学者や思想家はもちろん、この問題に「適任」であるべき三文指揮者自体も、ただ一つの反論も書けないでいるのだ。吉本の打ちこんだくさびは羽田闘争を契機として拡大している。清水幾太郎は日共の反革命の役割への痛烈な攻撃を開始し、日共が恥も外聞もすてて妨害している羽田闘争犠牲者救援活動は廿六人の文化人によつて精力的に展開されている。目の前でトン走して行く党や労組指導部の姿から危機を鋭くとらえた文化人は、みずから闘う大衆のもとへ行き、「諸組織への要請」なる一文を発表して公然と方針の転換を要求しはじめたのだ。

(二)

新らしい資本の攻撃の前に、社党・総評・日共などの既存左翼が雪崩をうつて右へ右へと落ちて行くことは再三われわれの指摘している所であり、心あるインテリゲンチヤや労働者が目の当りに見ていることである。それが、これまで労働運動を支配してきたが故に労働者階級を全体として道ずれにしていることも事実であり、われわれが深刻な危機意識をもつてこれと闘つている理由である。しかしながら、既存指導部の右への地すべりは、労働者大衆の中からの、かれらの指導性の急速な喪失を同時にもたらしている。汚れた表面の雪が陽気にゆるんで谷間に落ちた後から、まつたく新しい力が好き勝手な方向で盛上つているのだ。国会デモへの感激、羽田へ行けなかつた憤満を生き生きと語り合う下部指導者は、衝撃的な闘争の爆発のたびに汚れたカラを一つ一つ打破りつつある。与えた衝撃が大きければ大きいほど、それは速さをますのだ。鋭い感覚を職業とするインテリゲンチヤと、日々の闘いにすべてを経験する下部労働者の中に、もつとも鋭く「トロツキスト」の怪が踊つているのは偶然ではない。目の前に展開されている階級闘争を、主体的に認識しうる能力を持つた者と、階級闘争の中にいや応なしにぶちこまれるのに急で、それを苦痛と感じなくなる訓練をうけなかつた者には、現代の闘いがわかるのだ。

(三)

レーニンは、革命の思想は労働者の頭に外から注入せねばならぬと、その闘いに生涯をかけた。この思想は、一たび注入された思想は、力によつて追放しないかぎり新しくならぬことを意味する。自分の思考方法を固定化し、すべての事をそれに合せて解釈するために、それに合わぬことを思考の範囲の外に意志的におくことが、マルクス主義の党派性であるがごとき思想でガンジガラメにされた多くのマルクス主義者は、もはや、自分を階級闘争の中において変革者として思考することが不能になつた。この主体性の喪失は、日々の階級闘争に対するゾウのごとき不感性から、さらにアカハタのテープレコーダーとなつて闘争をぶちこわす経営党員を生む。吉本の指摘する通り、戦前の国家の民族のという思考方法を何の反省もなく現代に持込み、平和の中立のというインテリゲンチヤを生む。そしてかれらの素人政治ファンとしての発言が、フレッシュな労働者の頭に注入され、政治方針と実際の闘争との奇妙な背反を労働組合にもたらす。さらに、こうした混乱をはねのけるべき若竹のごとくのびてくる力を決定的に打砕いているのは、五〇年の日共大分裂において左翼として闘つた党員の切々たる「分裂の苦しい体験」なのだ。自からの思想の検討を恐れ、毛沢東の「非敵対矛盾」を金科玉条とする「マルクス主義者」群がもつとも桎梏となつている。吉本への反論を、リトマス試験紙のようにおそれているかれらは、四年前のスターリン批判によつて自己の思想の背骨がへしおれた苦痛を思いだしたくないのだ。

だがそれは、階級闘争から逃げだすか、敵の手厚い護によるかしなければ空しい希望であろう。階級闘争に口バシを入れるためには自己の思想的背骨を、代々木やモスクワにおくのではなく、自分の体のまん中にしまうことが今必要なのだ。コミンフォルムに預けた背骨を、俺のものだといい争つた所に五〇年分裂の致命的問題があつたことに気づくべきである。

(四)

階級闘争の新しい担い手は、資本の歴史的過程によつて生れつつある。合理化の進行は労働を単純化し、平均的に、短期間に熟練工となつた若いオートメ労働者を続々生み出している。新しい生産の担い手たちは年功序列的資本家の支配にも、同じ組合官僚の支配にも意欲的な抵抗を始めている。これにともない、旧来の労働者懐柔を解かれた年配労働者も亦、失なわれる権利への抵抗から闘争力をとりもどしつつある。労働者の戦闘化は、必然的な基盤をもつているのだ。

この変化をみずからのものにせんとするかつとうは、やはり資本家と、革命家によつて展開されている。

資本家の別動隊としての西尾派の活動は、労働者を資本の法則にいかにくみ込むかにそそがれている。中産階級化のスローガンは、階級闘争の思想の絶滅を狙う武器なのだ。

既成の労働者階級指導部は、西尾への対抗として、着々と「構造的改良」派に集中しつつある。トリアッチを先頭に国際マルクス主義の主流になりつつある、この思想は、世界労連をテコに、平和運動をテコに、社共統一の旗印しをテコに総評・社会党にも影響を強めている。プロレタリアートに代る反独占統一戦線により、独占の基盤をくずし議会により「政策転換」から「根本的社会改造」を戦略とするこの思想は、「革命のない社会」として国家独占段階における代表的右翼改良主義なのである。

こうした中で、ブルジョアジーの打倒とプロレタリア独裁の樹立をかかげるわれわれのみが、唯一の革命家として新らしい労働者階級の指導部となりつつあるのだ。今文化人の中心に、下部労働者の中に起つている左への分裂再編成を、われわれは強力に進めるであろう。われわれの武器は常に闘争である。独自の闘争の推進により、羽田の何百倍もの影響をたたきつけることである。

きびしい闘争につつかれて、不毛の皮フに血の通いだした諸君よ。まず自分の鎖を断ち、闘争の渦中にとびこめ。主体的な革命の思想を自分の背骨につくりあげよ。われわれは強制的にでもそれを推進するであろう。

経済分析

世界資本主義の流動化

自由化とはなにか ❷

先回のべたとおり、大恐慌をきつかけにブロック経済がつくられ、世界市場はいくつかのブロックに分断された。これは貿易量を減少さすから、資本主義にとつてのぞましいものではない。だから、各資本主義国は、戦争が終るか終らないうちに、世界市場の再建策をかんがえはじめた。その成果が、国際決済についてのI・M・F（国際通貨基金）、貿易政策についてのハバナ憲章＝ガットである。これらは、いずれも貿易と、したがつて国際通貨基金の自由化を、ねらつたものだつた。しかし、その目標はいまになつても実現されていない。いまさわがれている自由化とは、この目標を実現することでしかない。

アメリカの天皇支配

なぜ、いままでこの目標が実現されていないのか。それは、アメリカの生産力水準がズバぬけていて、各国はドル不足になやまなければならなかつたからだ。戦争が終つた時、戦争によつて巨額の生産設備を破壊されていたヨーロッパ諸国や日本と、戦時中その生産力を大きく発展させたアメリカとのひらきはひどいものだつた。これから出発して、戦後世界資本主義の再建は、アメリカを軸としておこなわれてきたのである。

それはまず、アメリカが、巨額の軍事支出を中心とする公共支出によつて、自国資本主義の「繁栄」を維持するということを基礎とする。各国の発展はこのアメリカの好況の上にのつかつているわけだ。アメリカがくしやみをすると世界がかぜをひく。他方、アメリカは戦後間もなく、他の資本主義国の資本主義からの離脱をふせぐために、マーシャルプラン以下の対外援助をおこなつて、その復興をたすけた。こうして、二重の意味でアメリカを軸として、世界資本主義は再建されていき、アメリカ以外の諸国の生産力水準は上昇していつた。ここでは、ドルが実際には世界貨幣としての役割を果していた。各国は対ドル地域貿易についてはとくにきびしい統制を加えた。こういうところでは、自由化が問題になるはずがない。

「高圧経済」にすき間風

ではどういう変化がおこつたのか。ここで、世界資本主義発展の基礎となるアメリカの繁栄が、軍事支出などの公共支出によつて維持されていたということを考えなければならない。これは「高圧」経済といわれているが、ここではインフレがどうしてもさけられない。他方では他資本主義国の生産も回復してきたから、絶対的な生産力水準ではアメリカがまだ高いとしても、アメリカの物価が高くなり、輸出がのびなやむということになる。アメリカからの金の流出がはじまる。これが最近アメリカにとつて問題になりはじめた。一方西欧諸国の独占体は、その基盤を拡大するため、欧州経済協力機構から最近の欧州共同市場にいたる一連の統合措置をおこなつて、ある程度の自信をもつて世界市場にのぞもうとしている。このように、西欧や日本の地位の回復とアメリカの地位の相対的低下によつて、貿易制限をある程度はずしても国際貿易のバランスがとれるという条件のもとで、世界市場が再編成されようとしているのが、現在の「自由化」問題の根本的意義だろう。そのきつかけとなつたのは五八年末の西欧諸国の通貨交換性回復だが、これは、もともと西欧域内貿易の比重が高いのに加えて、同年成立した欧州共同市場によつて域内貿易の拡大が期待できるという事情のもとで、その自信を表明したものといえるだろう。

不況到来で"逆戻り"も

自由化がこのようなものだとすると、それはたしかに世界資本主義の再建の結果であり安定の産物だといつてもよいだろう。だが、この再建がアメリカと他の諸国とのかけはなれた生産力水準を前提として、他の諸国がアメリカの「高圧経済」によりかかつているということを考えてみる必要がある。自由化はアメリカが「高圧経済」を続けてゆく余地がすくなくなつていること、他の諸国が今までよりかかつていた貿易統制という支え棒がとりはずされること、をも意味する。だから自由化はこの「安定」の基礎をほりくずすということでもあるわけだ。自由化は世界的にみれば、現在の好況が続けば、相当進むと逆にそれを進めてきた条件を失わせることになり、また逆戻りするという不安定なものなのだ。自由主義段階のあのはつらつとした自由な貿易は、今の資本主義にはもう不可能なのだ。

さて日本資本主義については、自由化問題はどんな意味をもつのか。それはヨーロッパ諸国と肩をならべて世界市場にまかりとおるほどの実力をそなえており、自由化はのぞむところなのか。それとも、アメリカが日本経済を従属させるために自由化をおしつけるのか。この問題は、具体的な日本資本主義の分析をまつてみないとわからない。次回にみることにしよう。

赤雷

★三月一日は、ビキニ六周年とあつて今年も文京公会堂で集会がもたれた。しかし、二・三年前にくらべて大衆運動としてはさびしいもので、カビのはえた「平和活動家」だけの集りに終つている。

★平和活動は昔日のはなやかさを失つた。サワラ実験に、平和運動の元締、原水協は抗議声明を発表することしかできなかつた。

★今の日中、日ソの最大の問題は、死んだ鳩山、内山のあととりを誰にきめるかだ。日ソでは石橋にすべしでもめている。日中では社共両党がたがいに理事長代理をきめ活動している。

★もつと深刻なのは、アジア・アフカ委員会だ。淡徳三郎はとうとう追い出された。日本の平和運動はどうかしている。

その原因は、社共の幅廣論だ。「廣く」するためボスのオルグに熱中する間に、組織は官製化し肝心の大衆はあきれて逃げてしまつた。残つているのは雑多なヤマ師と「平和屋」だけなのだ。

★「民族統一戦線」で自民党までふくめるはずの日共のピエロ諸君、淡氏を追い出したら、運動の幅がせまくなるのではないか。

原稿募集！

戦旗編集部

守るより攻めよ!

全国実力闘争で三池を包め!

白いハチマキの三池炭婦協の熱心なメモと目ざし。赤ハチマキの二瀬労働者数百名は、闘争中止の苦悩から新しい局面を見出そうと傍聴席から見つめている。この炭労福岡大会は、どのような具体的な闘いの方針をあきらかにしたであろうか。

たとえ不充分であつたにしろ、三池の労働者も、また炭労の戦闘的エネルギーを有する部分も、闘いの新しい展望を導きだすためにすでに闘いの準備を始めているであろう。萌芽的にしろ攻勢に転じようとするエネルギーを正しく展開させるか否かによつて、福岡大会の不充分さをのりこえてゆくであろう。

それこそ、全炭労、いや、全日本の労働者は求めてやまないのである。

統一的実力闘争をはばむものは?

「三池千三百名の首切りは十一万名首切り合理化の前哨戦である。したがつて三池闘争を全炭労の闘いに発展させ勝利に導く必要がある」ことがこの大会のただ一つの課題であつた。

それは「六〇〇円カンパ」大会を完全に下部のつき上げが破つたことによつても示された。当初、中執も三池指導部も〃長期に闘うことが勝利の鍵である。そのために資金が第一である〃とのみ考えたであろう。いやこれもまた重要な問題であつた。炭労中執が予想した以上に中小の炭鉱労働者は「三池闘争の勝利がなくては炭労の谷間・中小も救われない」どの積極的意な向を百円カンパとして大会をさらに前進させたのでもあつた。

だが〃六〇〇円カンパ〃だけで〃炭労の危機〃は救えないことをだれもが知りすぎるほど知つていた。

炭労の実力による統一闘争の方針はどのように決つたか。

みずからヤマを作れ

「①首切り合理化反対 ②賃闘一方八〇〇円・月二〇〇〇円要求 ③安保闘争」以上を柱として、総評春闘のヤマ三月下旬〜四月上旬に合せて三池闘争を中核に全炭労の統一闘争を組む。」

だが、闘争の戦術において、「三池の無期限ストを柱に三鉱連の統一闘争へ。同時に二瀬の企反闘争の体制を再編・確立しつつヤマを作る」とし「その戦術強化の時期は総評春闘に合せ、炭労中闘に戦術を一任」してしまうという点に注目する必要がある。

正に闘いの展望を炭労みずからつくりだすのだという姿勢からでなく、総評指導部にまかせ（今までどれぐらい裏切られてきただろうか？しかも春闘は果して〃ヤマ〃をつくりだして激烈な闘いになることがあるのだろうか？）炭労下部の労働者の中から闘う姿勢をつくりだし、それによつて炭労から統一闘争の時期、戦術をつくりだしてゆくという姿勢が非常に不充分である。

中闘の指令に従つて闘うこと、それなくしては炭労の闘いは組めないであろう。だが、つねに指摘されているように「中闘や山元支部よりは、企業連中闘に問題がある」がために、みずから中闘が統一闘争のための指導を各山元に行いながら、最大のヤマをつくりだすように積極的に乗りだし、しかも三池の労働者が闘いの戦術は中央がやるべきものであるという意識から抜けでて、全炭労の闘いの戦術について考え、そのためにただちに闘いを展開することである。

企反と賃闘の結合が鍵

ある代議員は炭労の首切り合理化反対闘争について適確に指摘した。

「十二万名の首切りという火災に対し、ホースはきおいよくでる部分と、ホースが停つたり反対側を向いたりしている部分とがある。これはホースがつまつているのか、それともモーターが故障か、あるいはホースのもち手の手もとが狂つているか、である」と。

四六協定から三池の三原則の確認の過程で起つた炭労の企反・合反闘争における妥協と後退について代議員は暗黙のうちに追求を行つていつたのである。「三鉱連の企反闘争の途中にでたいわゆる三原則と白紙撤回との関連いかん」の質問。それに対して中執は「三原則は中山斡旋案をめぐる団交の中で解決の方途としてだされたものであつてこれは考慮されねばならないが基本は白紙撤回である」と混乱し続ける。

だが問題は企反・賃闘の結合にはなにも解答が与えられないところにある。先にも指摘されたように、企反と賃闘は決して切り離されたものでもなく「企反闘争は長期の闘争である」のでもない。石炭景気が回復されつつあるとき、一方八十円の要求は敵の妥協によつても獲得可能なものであろう。しかし彼らは決して首切りから合理化のプランを放棄するはずはない。正に彼らの攻撃が賃下げと合理化・首切りを全プランの中に持つてこそ、石炭産業の合理化が可能であつてみれば、これを別個な要求であるから、同時解決という方向によつてアメをシャブラされないことである。

彼らの弱点をわれわれはテコとして三池闘争を柱にしつつ彼らの妥協の路線を打ち破りながら〃同時解決〃の方針をつらぬき通し、賃闘の中で企反闘争をも発展させ、攻勢に転じながら炭労統一闘争への道を大きく切りひらく必要こそあるのだ。

押して押して押しまくり三池・二瀬を孤立させることなく全炭労の闘いへ発展させることである。

この思想—攻撃こそ最大の勝利—こそ求めるもの である。

全炭労の勝利を
勝敗を三池だけに求めるな

「三池闘争の勝利がなければ、炭労の勝利はありえない」とだれからも語られ続けてきた。しかし、そのウラには、「三池しか闘えない」という現状肯定があるのだ。三池の労働者はそのために単に「長期にねばり強く闘う」ことダケしか方針を与えられない。それは第二組合、民社党の攻撃を、下部労働者を統制するという思想教育だけで食いとめようとすることになつてしまう。

必要なのは、「組織固め」に終始するのでなく、三池労組自身が「炭労の勝利なしに三池の勝利なし」という考え方につらぬかれた方向を三池指導部が出すことだ。

「三池だけしか闘えぬ」などという考えをすてて、二瀬・大平洋・宇部に、と闘いを拡大してゆくことだ。今、闘いの火花は三池から拡がろうとしている。二十六日の中央委は三月廿日から三鉱連・二瀬が、四月から全炭労が、三池支援の統一闘争に入ることをきめた。

石炭総資本は三池の減産分を他山の増産であなうめし三井資本を勝たせようとしてるい。これに反撃し攻勢に転ずるのだ。敵の妥協とアメにまどわされず徹底した闘いを組むのだ。

これによつて、電通・国公地公などの闘いを鼓舞し、安保闘争に点火し春闘を資本階級へ激しくぶつかる闘いとし、はじめて、炭労の最後の勝利がかちとられるのだ。

どこで妥協してはいけないか
賃上げ斗争へのヒント

春闘が始つた。再三指摘されている様に、今年の特徴は経済闘争に重点がおかれている。これは打破られねばならぬ。安保闘争と三池の闘いを中心にすえねばならぬ。が、では賃上げはどう闘つたらいいのか。ここでも改良主義と革命思想の対立がある。しかし職場の条件によつて具体的方針は大きくことなるので、その基本的な考え方のみを指摘しておきたい。

経済闘争は、大衆の力を引き出し、資本家ともつと初歩的な闘いを通して労働者の階級的な組織——組合をつくつて行くものだ。そしてこれが資本家との「共存」に終らぬためには、労働者が階級として資本家全体に「強要」する政治闘争に、あらゆる機会をとらえて発展させねばならぬものな。

まずこうした賃闘の条件自体から、「徹底的な大衆討論と職場の闘いが出発点」にならねばならない。どうせ満足にならぬ資本主義社会なら、大衆のあらめる不満を引き出し、闘いに組みこむことが第一だ。

今、多くの単産で賃金綱領つくりが流行つている。これは、ここ数年間の賃闘が闘つても百円・二百円しかとれず、定昇などでしめあげられているのを、何とかして打破ろうというなやみのあらわれだ。だが各単産で学者を呼んで作つている賃金綱領を、大衆にむかつて「討論してくれ」といつてできるか?あんな長くて、むつかしいものを読めというより職場の不満をていねいにさぐつた方が早くはないか。

第二は、資本家の狙いをつかみ、ここだけはどうしても譲れない所を明らかにすることだ。資本家は賃金を労働者を一番支配しやすいように使つている。安保闘争をつぶすために賃上げに応ずることだつてある——このときは安保闘争をやめないことが中心だ。今年の敵の攻撃は安定賃金だ。休戦協定は絶対のんではならぬ。同産業他社の平均賃金で自分の所の賃金を決める方式もダメ。スト権は絶対に守りぬけ。首切り、配転労働強化、職制強化等をカネと引かえにするな。

第三、二と同じであるが賃金体系に口出しをしたら注意せよ。能率配分、差別昇給、定昇の増加、職務給体系などへの移行の気配が見えたら妥協するな。資本家の出してくる賃金体系によいものはない。特に体系を複雑にすることは、労働者同志を対立させ、賃金要求の出し方さえわからなくさせるものだ。鉄連鋼管の能率配分拒否、全電通の等級差別撤廃要求はこれを打破るものだ。特に合理化にともなつて若い層の賃上げをダシに完全な職制賃金制を「労働に応じた賃金」をおしすすめていることに注意せよ。

第四、ではわれわれの要求で欠かせぬ点はどこか。今「同一労働、同一賃金」とか「産業別最低保障給」とかムツカシイ賃金理論がいろいろ論ぜられているが「理想的賃金体系」などを考えない方がよい。賃金は皆が自分がいくらもらつているのかスグわかり、なるべく差別がなく、さらに、「上げやすくて下げにくい」のがいいのだ。これになるべく近ずくことだ。

第五、それにはどうしたらよいか。まず、絶対に下げられぬこと。労働強化もダメ、いろんな手当の廃止も、保険や掛金（天引される）の値上げも、残業率の切下げも、それをおぎなつておつりがこなければ認めない。これらを差引したうえでほんとにいくら上げるのか、と考えること。

次にいくら上るかはつきりさせ、それを大幅にすること。電通は七千円、住化は五千円、だれでも上る——これが大幅賃上げというものだ。もちろん臨時も女子も一緒にだ。ベースアップに代つて一律〇円方式の良さはここにある。変な差別も入りこめない。一律〇%は一般に良い方式ではない。

第六、プラスアルファはくせものだ。合化を中心に定昇などがどんどん入つてきたのは、このアルファを高給取りに与えていたらなだ。電通のようにスツパリ捨ててしまうか、全造船のつぶされた原案や国公のように、アルファを特に賃金の低い人に与えて引上げることを追求せよ。安定賃金とのケンカは、このへんから始まりそうだ。私鉄のように自ら職種賃金のドロ沼に入りこんでいてはとうてい闘う力が出てこない。

第七、相手が「上げにくい」安定賃金なら、こつちは「下げにくい」方向で闘おう。日給、時給では資本家の気が変ればぶつとばされる。なんとか手当やボーナスや残業が多くなると、大変不安定であり、自然に「会社のもうけ」を考えやすくなる。基本月給をなるべく多く、残業なしで食えるようにしよう。残業すれば、二倍三倍の割増で金がとれるようにしよう。ボーナスは本俸にくり入れ、その上でもう一度要求しよう。欲が深くて当り前なのだ。さらに健康保険や、事故の補償、退職金などは、賃金と交換条件でなくたつぷり取つておこう。最近資本家は、こうした社会保障は政府でやるべきだ、と無慈悲になつてきた。だが政府がやらぬのだから資本家からもらつておこう。

第八、まだいろいろな点があるが、何よりも大切な点は自分の所だけ闘いを止めぬことだ。他が——それは三池のように拠点の時も、鉄連や私鉄のように中小の時もあるが——解決するまでともに闘うのだ。労働者の要求は統一し、闘いも統一しなければならぬ。脱落と抜けがけのいい子こそ一番なつてはいけないものだ。

どの単産も、大体平均三千円の要求だ。それならなぜ総評全体で「全労働者に三千円の賃上げを!一律八千円の最低賃金を!」とゼネラル・ストライキに入らぬのか?こうなると賃闘の問題はカネではなくなる。実際闘い方の問題なのだ。

ふりかかる火の粉をはらいのけて進め!
長崎造船細胞集団離党声明
日共、労働者に見放さる

日共内部の左からの再編が進んでいる。日共が誇る巨大経営細胞の一つ、三菱長崎造船所細胞が集団離党し前細胞長の名で〃あくまで共産主義者として闘う〃旨の声明を発表した。

十一・二七、一・一六闘争に日共中央は闘争を抑えつけるためにだけ行動し、その堕落ぶりを暴露した。党内最左派はついに見切りをつけ、真の前衛部隊の結集をめざして日共を去りつつある。十一月末の京大・同大細胞の解散、十二月の港地区委員会の公然たる党内闘争の開始（戦旗一号参照）とそれへの除名処分はその一端を示した。今度の長船細胞の集団離党は日共の解体が一層進んでいることを明らかにしている。

長船細胞は党内最左派としてつねに県委員会、党本部と対立していた。最近の長船の闘争方針、安保国会デモ・羽田闘争などで対立は深まり、上部機関は「トロツキスト」として細胞長を査問するなど、組織的しめつけを強めてきたのだが、革命的労働者は日共についに見切りをつけ一月二十日約四の三が集団離党するにいたつた。

上部機関はこれに対し「集団離党などは気狂い沙汰で反革命的行為だ。認められない」とし、前細胞の主要メンバー二名を「反革命的挑発分子」として除名処分にした。

二五日の声明はこれに対してだされたものだが、これで前長船細胞は真の前衛党結集のため、全面的な活動に入ることになつた。声明の全文次の通り。

「日本共産党は、理論的にも実践的にも、革命政党としての性格を失いつつある。

今、問題になつている臨時工の組合専従闘争についても『実力行使は避けよ』とか、まるでナンセンスな指令ばかりだしている。今や日本共産党は、前衛政党としての生命を失い、こましやくれた評論家と大衆追随主義の集団に転落した感じだ。労働者の最良の部分から見放されつつある党の現状は、トロツキストなどのレツテルばかりで解決する問題ではない。

ふりかかる火の粉は払いのけねばならぬが、敵は資本家と岸政府なので、あくまで共産主義者として、全力を労働者階級解放のため盡したい。

一九六〇年二月二五日
元日共長船細胞
委員長　西村卓司
同細胞委員　芹川澄

なお、現日共長船細胞委員長の河野氏も「バカ気た話だ。西村、芹川の二人は、有能な党員であり、西村氏はレッドパージ後の沈滞した職場に、細胞を再建して以来の中心的指導者だ。一月に集団離党があつた時、私はふみとどまるべきだと思い、がんばつたが、デタラメな理由で両氏を除名するなど本部のやり方は気狂じみている。こんなことでは職場の大衆に責任がもてないので、離党せざるをえない。おそらく細胞は一割くらいになるだろう」と語つて離党を表明した。

まさしく、日共は「労働者の最良の部分から見放されつつあり」、それに代るべき新たな真の前衛党は、共産主義者同盟として日々最良の革命的労働者を迎え入れて力強く成長しているのだ。（九州地方総局発）

国際問題
"流線型帝国主義"
——中南米のアイク——

十九日、アメリカはキューバに謝罪した。米機爆撃事件の事実を認めたのである。また、パナマ運河に星条旗とならんでパナマ国旗の掲揚を許すという。満洲国同然のカイライ政府をつくつてコロンビアからパナマ運河を奪つたアメリカ帝国主義者は、この「スキヤンダルと不名誉と恥辱の道」の通行税で年々八千万ドルもうけながらパナマ政府にはたつた二百万ドル（五年前までは四十万ドルだつた）しか払わないのだ。だから去年の十一月独立五六周年の日に二千人の労働者学生が道一つへだてたアメリカ領にスクラムを組んでおし入り気勢をあげた時、アメリカ政府は陸軍を出動させてやつと鎮圧した。そのパナマに、である。

六年前、グアテマラ革命政府にたいしてとつたダレスの態度を思えば、大変なかわりようである。——今アメリカブルジヨアジーは中南米政策を大きくかえようとしているのだ。

二十二日から二週間、ブラジル、アルゼンチン、チリ、ヴルグアイの四ケ国をまわるアイクの中南米行脚の目的もここにある。廿三日最初のブラジルで「繁栄と融和を目指した南北協力運動を」という歯のうくようなブラジリア宣言を発表した。翌日議会では「軍縮で節約した資金を平和的開発のための建設的計画に向ける用意がある」と大ミエをきつた。大ミエが不信感で相殺されぬために、金も積んでみせた。援助資金の多額の増額と、資本金十億ドル（内米国が四億ドル出資）の米洲開発銀行設立、中南米自由貿易地域への援助等々。

ニコポン外交がアメリカ帝国主義者の世襲領地中南米でもはじまつたのだ。

その原因にはいろいろある。はげしい反米民族運動も大きな一つだ。しかし、それだけだつたら、今までのヤリ口で鎮圧するのが手つとり早い。原因はまだある。それはブロツク化を含んで進んでいる帝国主義同志の競争の激化と、「南北問題」といわれる「東の国」との間の援助競争だ。

西独の商品が入つてきている。一昨年発足した欧州共同市場に、コーヒーや銅などの農鉱産物生産で中南米の競争者であるアフリカが含まれていて、おちおちしてもいられなくなつてきた。これに対抗して中南米自由貿易地域ができて特恵関税でもできたら、アメリカも追い出されることにもなりかねない。その上東西経済競争に熱をあげているソ連が、アメリカがうつかりしている間に割りこんできている。アメリカブルジヨアジーは今までのようにブラジルにはコーヒー、アルゼンチンには小麦と羊毛、ヴエネズエラには石油、というように後進国特有の極端なモノカルチユアを利用してもうけにもうけ、反米運動には鉄火で応える、いうやり方では中南米を自分の方にひきとめておくことが困難になつてきたのだ。

だから、「平和競争の時代」には別の仕方で支配する必要だ、というわけだ。民族ブルジヨアジーにまで「アメリカは中南米に一こうに目をかけてくれない。一度もわれわれを人間として扱つかつたことはない」などといわれないように「約束」も金もやらねばないのだ。中南米二十ケ国のうちでも親米的といわれる四ケ国をまずまわつて最初のカタメをやろうというのが今度のアイクの目的である。

これはアメリカだけにかぎつたことではない。コンゴーの独立をあつさり認めたベルギー、アルジエリアに「自決権」を与えるといつて共産党に支持されたドゴール。最近の一つの流行でさえある。—これは「一歩前進」か。いやいやとんでもない。今の「緊張緩和」の平和的ムードに含めて、一寸やり口をかえて民族主義者を抱きこもうとしているだけだ。〃流線型帝国主義〃というのが彼ら新手なのだ。

× ×

問題は、共産主義者がこれとどう闘うかだ。

これに対し、フルシチヨフは、「平和」の約束とアメの量で競争しようとしている。

新らしい〃南北問題〃の時代に各国の民族主義的ブルジヨア支配者は東にも西にもつかずはなれずの態度をとる。そうすれば両方からとれるだけのアメをとれると言うわけだ。

「帝国主義だつて〃社会主義〃だつてくれるものはもらおうじやないか。これが中立のいいところさ」とナセルもスカルノもネールも云う。民族主義導かれた反帝闘争は〃流線型帝国主義〃の前に牙をぬかれてしまうだろう。

この時だ、社会主義者が人民の反帝闘争の先頭に公然とおどりだすのは。

ところが、クレムリン国際共産主義はこれに反対なのだ。アイクが行くさきざきでトマトや石をぶつけられ、それがクレムリンの手先の仕わざだ、といわれたら、せつかく進みかけた東西交流もオジヤンになるというわけだ。フルシチヨフが中南米の共産党に「アイク反対デモはつつしめ」と指令したという話はありそうなことである。論より証拠、去年十二月、フランス・イタリアでアイクは共産主義者にも温く迎えられたのだから。プロレタリアートがもつとも階級的思想で武装される必要のある時クレムリン共産主義者は「〃流線型帝国主義〃には銃を向けるな」というのだ。

だが、闘う人民はそれを我慢できない。フルシチヨフの「内政不干渉」にもかかわらず、アイクは南米の土に足を下したとたんに、プエルトリコのサンフアンの飛行場で「独立を忘れるな」のデモに迎えられた。ブエノスアイレスでは二日おきに反米デモが街をねり歩き、米国旗をひきさいている。アイクがニコポン旅行の途中、避暑地にいつて釣を楽むことなどできなくすることが、だまされつづけてきた人民の仕事だ。もちろん、これが民族主義運動にとどまらず、真のプロレタリア国際主義になるには、真の共産主義者が先頭にたたねばならぬ。

プロレタリアと文化
プロレタリアの魂と感覚への訴えの喪失
—現代ソヴエト音楽の堕落—

黒川　透

セレブリヤコフというソ連のピアニストの弾くソ連の現代作品を聞いた。音楽会へはおいそれと行けない身分なので、ラジオで聞いた。ラジオでよかつた。ものの一・二分聞いて私はあまりの白々しさにスウイツチをモダンジヤズの方へ廻した。たとえ何と名が付こうと誰のであろうとつまらない音楽とつき合わされる義理はどこにもない。社会主義社会の音楽の名のもとに、こんな代物がプロレタリアの感覚をくすぐり、とろかし、おまけにプロレタリアの財布から高い金をしぼり取るとすればこれほどの欺瞞、裏切りはないし、こんな音楽が腰を低くし握手の手をさしのべてブルジヨワ楽壇に売り込みを行つているとすれば、このにせ物の叩き売りを弾劾せねばならない。

大体あんなロマン派まがいのピアノ協奏曲を、この帝国主義段階のむき出しの相克の時代に書いている神経はおよそ理解できないし、それを演奏会の名において拒否もせず弾く方も弾く方だ。『形式は民族的、内容は社会主義的」だが何だか感覚に対して無感動なことは確かだ。だらだらと歌う旋律、散慢な構成、何の輝きもないピアノの音、ロマン派の時代に書いたとしても、こんな作品はショパンやシューマンの燃えたぎる生命力の前に消え去る存在でしかない。これが民族主義でござい、と如何にも『民族的』だとわかる曲を書いて見ても、そんなのは一つの『特色』にすぎないのであつて、真に内面的な現代的な感動を欠く時それは自然生性に根ざす民族社会の特異性の標示でしかない。観光絵葉書ないしはお国自慢と変るところない。

労働力の商品化、人間の物質化が世界的規模で進行し、プロレタリアートは自らの労働で生み出した膨大な富、豊富な感覚の対象とむき合いながらそれから引き裂かれている時、その疎外された感覚に与えるに俗悪なまがいものを以つてするとは!そもそもソ連の音楽家達は何をさしおいても世界のプロレタリアートの魂に感覚的に訴えかけることを全く忘れた如くである。作品においても演奏においても、世界の資本主義諸国を『興行』して歩くやり方においても。彼等の俗悪さ、肉体と精神を切り離されたプロレタリアの魂の失喪はどんなにヴイルトウオジテ(巨匠らしさ)の装いをこらそうと、アカデミツクな曲の研究と『忠実な』解釈を誇ろうとも、『原子力機関車のような圧倒的な演奏』で聴衆の上にのしかかろうと、薄手の豊かちや楽天性で魅惑しようとしても、疎外のただ中で自らの感覚の解放を求め、音に肉迫する者に対しては本質を暴露する。続々と『巡業』して来た演奏家達、ギレリスのピアノ然り、コーガンのヴアイオリン然り、レニーングラード・フイル然り。鋭敏な感覚をひらめかせながらも、小器用な都会的なムードに堕して行つたプロコフイエフを見よ、執拗な音における追求を試みながら『楽天的な要素が強すぎる。形式主義だ。』などと自己批判を要求されこれに屈して紆芝居的なシンフオニーを書くショスタコヴーイチを見よ。「楽譜の『表紙』に祖国への愛、平和のための闘争、諸国民の友好といつた心のときめくような大きなテーマが書かれている、ただそれだけの理由でわれわれは作品のおおうべくもない欠陥を何度大目に見て来たことだろう」と慨嘆するハチヤトリアンもいささか耳新らしいエキゾチシズムから抜け出せないでいる。音楽は何か外界、現実の『認識』を与える手段ではなく、音そのものにおいて疎外された人間の感覚に訴えかける活動であり、新しい音楽的客体（オブジエ）の創造である以上、主体的追求が専ら、そして徹頭徹尾音そのもの、音の構成において行われるのである以上、様々の試みを『形式主義』ときめつけるのは、音における革命を放棄したものに外ならない。問題は音そのものがどれほど生命力に満ちているかである。巨大な資本主義の生産力によつて生み出され、音楽家によつてとらえかえされて姿を現わした電子音楽などの新しい豊富な可能性をブルジヨワの手中から奪い取り、自らの全生命力を音として結晶させ、プロレタリアートの感覚の解放をなしとげるのが真の前衛の任務である。

裏切をのりこえて進め
統一闘争への展望開けず
国労青函地本大会

国労青函地本臨時大会が二十一日函館労働会館で、代議員八十名傍聴百名、とくに山田書記長出席のもとに開かれた。

彼は、五十四回中央委員会の決定に関する誤解をとくためにと日本的労働組合主義の路線についてながながとぶち、不乗便問題では当局の態度が予想外に強硬であること、したがつて闘いはきびしいと説教した。「われわれは中央委員会で不乗便問題で討論し、分りにくい『不乗便』というスローガンをやめ『船員関係職員の勤務体制の確立』に改めた。この線で中央交渉を行う」と目標を不明確にした。

彼は浪曲的アジで、「これまでの中央指導部の指導は全く正しい、当局はものすごく強固で闘争はきびしく、全体的配慮が必要だ」といつて裏切りをごまかした。

昨年七月青函地本定期大会に出席し、調停案をのみ、交渉を中央にすいあげた第三波中止の立役者はこの山田だつたのだ。

「休暇請求書は九十%に達しているが執行部はいつたいなん日休暇闘争をやるのか」に対しては執行部側はたじたじでただ予算は二日分組んでいるとの解答であつた。

大会は、山田の浪曲にごまかされて、経過報告を満場一致で通してしまつた。また、大会は、十割休暇を満場一致決定したが、中闘の中止を封ずる強固な意志統一はなかつた。

その上、休暇の日程は、三月上旬が簡単に中旬に移され、再三の妥結権の青函地本移譲の要請にもかかわらず指令権は中央だ。

裏切りが明確にならぬままに裏切りは開始された。

今こそ重大な裏切りの可能性を粉砕して非妥協の闘いに前進せよ!

最前線

ファイトはどこから
国公ピケラインの声

「二・一スト以来だつて新聞記者がいつていたぜ」（爆笑）「よつぽど今まで闘つたことがなかつたんだなあ」

「お巡りがでてきたら腹がすわつたよ。やろう!て気になつたね」「追つぱらわれてもまたすぐピケはつたのはよかつたよ。だけど組合はなぜ指揮しなかつたんだい」

「しやくにさわつたのは官房のやつらだ。課長の白腕章（注・当局の印）はなにもしないのに若い官房のやつらはこの時とばかりマイクや警官との連絡、組合員を誘導するのにとび歩いていた。あいつらを組合としてなんとかしろよ」「入つたのは七階（林野本庁）が多いな。やつらは第二にいつたからおれたちのピケまで破るんだ」「こそこそ入つた人をちやんと組合で点検して話合つてくれ。もとの組合幹部で入つたやつはつるしあげてやる。はじめにマアマアにすると今度はスト破りがあたり前になるよ」

「一発主義はいかんと組合はいうが、ゴチヨゴチヨ小さいのをやつてもしようがないよ。思い切つてバカでかいのをガンとやれつていつてるのがいるよ」「そういうのはずいぶんおおいな。一発でもいいから胸のすくようなのをやつてみたい。そうすりや政府も骨身にこたえるだろうつてね」「ねばり強くといつても、どのへんになつたらガンとやるのかちつともいわないからな。組合は」——

これは廿五日のひる休みに全農林のある分会で開かれた活動家の自主的討論の一コマ。